

# 学生口頭発表「最優秀賞」を受賞して

博士後期課程環境共生系専攻3年 吉田 泰子

昨年(2018年)10月に岐阜で開催された日本マイクログラビティ応用学会第30回学術講演会で学生口頭発表にエントリーし、「ISS『きぼう』における『Group Combustion』実験結果—微小重力場におけるランダム分散液滴群の局所燃え広がり限界—」という題目で口頭発表をさせていただきました。この学会には昨年も参加しており、前回はポスター発表、今回は口頭発表での参加となりました。この学会では毛利ポスター賞という賞が設けられています。これは、元宇宙飛行士の毛利衛さんが学生支援のために、発表者全員の発表を聞いて審査を行い、優秀者を表彰するもので、多くの学生が優秀賞を目指してしのぎを削っていました。今年からは毛利ポスター賞に加えて、学生口頭発表が設けられ、毛利さんと学会に参加されている先生方が審査を行われます。前回のポスター発表では、あと少しというところで最優秀賞を逃し、優秀賞という結果でした。今回こそは最優秀賞を目指して頑張ろうと決意し、口頭発表に挑みました。

私の研究内容は、微小重力場における燃料液滴の燃え広がりに関するもので、今回発表した内容は、2017年2月から7月にかけて国際宇宙ステーションの日本実験棟「きぼう」で実施された初の燃焼実験である「ランダム分散液滴群の燃え広がり」と群燃焼発現メカニズムの解明」通称“Group Combustion”実験の結果についてでした。この研究は公募で採択されてから実際に実験が行われるまでにおよそ10年という長い年月を経ての実験であり、多くの先輩方が様々な形で携わっており、私は先輩方が苦勞して築き上げた後の運用段階から携わらせていただきました。

私は都内の高専の専攻科を卒業後、大学院から山口大学に進学し、エンジンシステム工学研究室に入りました。高専時代は、乱流燃焼について研究しており、同じ燃焼の研究ではありましたが、扱う燃料も気体から液体に、実験環境は通常重力場から微小重力場に変わり、途中からきた新参者の私に務まるのだろうかと不安を抱きながらのスタートでした。運用は無事大成功しましたが、次にこの成果をまとめ、人に伝える段階になり、私の苦悩が始まりました。たくさんあるデータをどのようにまとめれば重要な結論が浮き彫りになるか悩みました。これまで携わってきたたくさんの方の想いが含まれていると思うと大きなプレッシャーではありましたが、負けずに頑張ろうと立ち向かいました。その結果、学生口頭発表で最優秀賞をいただくことができました。更には同研究室の後輩も同賞を受賞することができ、最優秀賞4人のうち半分を山口大学が占める結果となりました。

最後にいろいろ助言をいただいた研究室のスタッフのみなさんに感謝申し上げます。高専時代のいくつかの出会いをきっかけに山口大学大学院への進学を決め、私も山口大学の学生の一人となり、結果を残すことができ本当によかったと感じています。

